

いぶき 28号平成 25年 5月

世界の偉人たち「驚きの日本発見記」

第27回：ヴィレム・ホイセン・ファン・カッテンディーケ（1816～1866年）



「日本人の欲望は単純で、贅沢といえただ着物に金をかけるくらいが関の山である。・・・上流家庭の食事とても、至って簡素であるから、貧乏人だとして富貴の人びととさほど違った食事をしているわけではない。

日本人が他の東洋諸民族と異なる特性の一つは、奢侈贅沢に執着心を持たないことであって、非常に高貴な人びとの館ですら、簡素、単純きわまるものである。すなわち、大広間にも備え付けの椅子、机、書棚などの備品が一つもない。」（出典：『長崎海軍伝習所の日々』水田信利 訳（東洋文庫26・平凡社）

カッテンディーケはオランダの海軍軍人で、徳川幕府が発注した軍艦ヤーパン号（後の咸臨丸）を長崎に回航し、1857年（安政4年）に来日しました。そして、幕府が開いた長崎

海軍伝習所の第1次教官ペルス・ライケンの後任として第2次教官となり、勝海舟などの幕臣に精力的に航海術・砲術・測量法などの近代海軍の教育を精力的に行いました。第一次教官ライケンは「狭く、深く」追求するタイプで、何事も中途半端な知識をととても嫌ったと言います。一方の第二次教官のカッテンディーケは「広く、浅く」のタイプで、できるだけ伝習生には多くの知識を教授するよう努めた正反対の人物だったようです。

また、彼は「日本の農業は完璧に近い。その高いレベルの農業から推察するに、この国の面積は非常に莫大な人口を収容することができる」と日本の農業レベルの高さに驚いています。水田稲作は大昔からの日本人の生活の基盤となり、個人や家族の単位を超えた共同の生活と作業を通じて、「和」や「公」の精神、さらには「勤勉」を子孫に伝えてきた日本の伝統であったことが偲ばれます。

（参考：「長崎の歴史」<http://www.kiyou.net/n-rekisi.htm>、「古代の先人に学ぶ」

<http://www1.kcn.ne.jp>

[/~kawamura/p1000.html](http://www1.kcn.ne.jp/~kawamura/p1000.html)） 〈M. I〉